

Title	構造としての結び目：晩年のラカンについて
Sub Title	Le nœud comme structure : sur les dernières années de Jacques Lacan
Author	岩崎, 洋介(Iwasaki, Yosuke)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.42 (2006. 3) ,p.97- 111
JaLC DOI	
Abstract	<p>ジャック・ラカンは1966年に出版されたそれまでの主要論文や講演の記録をまとめた『エクリ』の段階で既にシェーマZなど図形や記号を伴う概念を導入していたが、『エクリ』以降もメビウスの輪やクロス・キャップ、トーラスといったトポロジー的な図形、さらに「マテム (mathème) 」とラカン自身により名づけられた定式や論理学の量記号を援用してきた。そしてその晩年にあたる1970年代、学説的に最も力を注いでいたのはポロメオの輪、ないし結び目を己の学説に導入することであり、その執着ぶりは例えばエリザベト・ルディネスコによる『ジャック・ラカン伝』に窺えよう。「ポロメオの結び目」とは北イタリアのマジョーレ湖上の島にその名を残すポロメオ家の紋章に由来し、三つの輪、仮に輪a、b、c、とすると、aはbの、bはcのそれぞれ上に部分的に重なる形で位置する時、cがaの上になるように組み合わせられた図形を指し、三つの輪の上下関係が$a > b > c > a > b \dots$という形で循環している。ラカンも度々指摘するように正確には「結び目」ではなく、三つの「輪」が三すくみに繋がれている図形である。その輪の交叉する部分を取り出した三つ葉のクローバー状の「結び目」もポロメオの輪と同様に言及される。これら図形の重要な特徴は、輪を一つ外すと、残りの二つの輪も互いに外れること、結び目の場合は線が交叉する個所が三箇所あるわけだが、そのうちの二箇所て交叉する線の上下を入れ替えると結び目が解消されたただの輪になってしまうことである。こうした特徴を持つ輪は必ずしも三つとは限らず輪の数をいくら増やしても、そのうちの一つの輪を外すと鎖状に繋がっていたそれらの輪は個々の輪に分解してしまうといった図形を考えることは可能であるが、それは輪の数が三未満ではそうした関係は得られず、三が最小値である。こうしたポロメオの輪自体は明らかにトポロジー的な図形であるが、このポロメオの輪への関心はことに『エクリ』以降</p>

に強まったラカンのトポロジーの援用の単なる延長とみなせるのであろうか。ラカンのトポロジーへの関心は上記ルディネスコの評伝によると1951年に始まるが、『エクリ』に収められた諸編を見る限りでは、場 (topos) と場の関係といったトポロジーの出発点となった観点による考察は色濃いものの、メビウスの輪などのパラドクシカルな図形はそれ以降の60年代後半になって盛んに援用されてくる (メビウスの輪が『エクリ』の中では最も後年に書かれた〈La science et la vérité〉で軽く言及されてはいるが)。ラカンがポロメオの輪について初めて言及したのは1972年の2月9日のセミナーلでのことであるが、集中的に取り上げられ始めるのはその次の年度である1972-73年度のセミナールEncoreの全11回あった講義の内の第10回目 (〈Ronds de ficelle〉) 以降のことで、丁度マテームと入れ替わり講義中にしきりと描かれる図式となる。すなわちまとめると『エクリ』以降のラカンの図式に関する主な関心は、トポロジー的な図形→マテーム→結び目、という順で移行している。マテームとは分析家、大学、主人、ヒステリー患者の四つにディスクールを分け、精神分析の立場を明確に位置づけるものであった。これは当時ラカンの属していたフランス精神分析学会 (La Société française de psychanalyse) の解消に伴い、1963年に自ら創設したパリ・フロイト学派 (l'Ecole freudienne de Paris) の基礎付け、また精神分析が新設されるパリ大八大学に独立した学部を設置するにあたり、取分け科学的な知と精神分析の関係に見通しをつけ、いかに精神分析を「教育」しうるかという問いへの根本的な反省が要請されていたという外部的な事情も重なっている。結び目を考える時、結び目の取り上げられた時期がこのマテームの時期の後にあるということが重要となってくる。ジャン＝クロード・ミルネールはラカンの学説を三つの時期に分けているが、1972-73年度のセミナールEncoreを第二期から第三期を分かち位置にあるとしている。それはこの年度の講義でマテームの時代が頂点に達し、それと同時にそれをいわば「脱構築」するものとしての結び目が本格的に導入され始めるからだ。ミルネールに拠れば、第二期のラカンは数学におけるブルバキの影響を受け、その数学言語の形式化に倣い精神分析におけるディスクールの形式化を推し進めたものであったが (ラカンを除いてはブルバキと同じように執筆者が無記名なパリ・フロイト学派公認の雑誌Scilicetにおいてその傾向は著しい)、1968年の学生運動から70年代にかけての数学におけるブルバキ自体の後退、そして自身の学派内の不和といった外部的な影響もあり、マテームによる形式化及びそれに基づく精神分析の伝授へのさらなる見直しの必要をラカンが感じざるをえない状況で登場し、マテームに替わり盛んに援用されるようになったのが「結び目」であった。そうした見地に立つと、70年

	代にラカンが執着を示した結び目とはマテーム以前のトポロジー的な図形の援用とは性格を異とするもの、少なくともその単なる延長にあるのではない、と見なさねばなるまい。ラカンが結び目に着目したのも（少なくとも当時は）結び目が数学的に理論化されていないものであったからである。実際、ラカンの結び目とは以下に見るように、トポロジー的な対象として数学に基盤を求めるものではなく、むしろ数学を含めたあらゆる言語の「起源」を射程にいたったものである。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060331-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

構造としての結び目

—— 晩年のラカンについて ——

岩崎 洋介

ジャック・ラカンは1966年に出版されたそれまでの主要論文や講演の記録をまとめた『エクリ』の段階で既にシェーマZなど図形や記号を伴う概念を導入していたが、『エクリ』以降もメビウスの輪やクロス・キャップ、トラスといったトポロジー的な図形、さらに「マテーム (mathème)」とラカン自身により名づけられた定式や論理学の量記号を援用してきた。そしてその晩年にあたる1970年代、学説的に最も力を注いでいたのはボロメオの輪、ないし結び目を己の学説に導入することであり、その執着ぶりは例えばエリザベト・ルディネスコによる『ジャック・ラカン伝』に窺えよう¹⁾。

「ボロメオの結び目」とは北イタリアのマジョーレ湖上の島にその名を残すボロメオ家の紋章に由来し、三つの輪、仮に輪a、b、c、とすると、aはbの、bはcのそれぞれ上に部分的に重なる形で位置する時、cがaの上になるように組み合わせられた図形を指し、三つの輪の上下関係が $a > b > c > a > b \dots$ という形で循環している。ラカンも度々指摘するように正確には「結び目」ではなく、三つの「輪」が三すくみに繋がれている図形である。その輪の交叉する部分を取り出した三つ葉のクローバー状の「結び目」もボロメオの輪と同様に言及される²⁾。これら図形の重要な特徴は、輪を一つ外すと、残りの二つの輪も互いに外れること、結び目の場合は線が交叉する箇所が三箇所あるわけだが、そのうちの二箇所を交叉する線の上下を入れ替えると結び目が解消された単一の輪になってしまうことである。こうした特徴を持つ輪は必ずしも三つとは限らず輪の数をいくら増やしても、そのうちの一つの輪を外

すと鎖状に繋がっていたそれらの輪は個々の輪に分解してしまうといった図形を考えることは可能であるが、それは輪の数が三未満ではそうした関係は得られず、三が最小値である。

こうしたボロメオの輪自体は明らかにトポロジー的な図形であるが、このボロメオの輪への関心はことに『エクリ』以降に強まったラカンのトポロジーの援用の単なる延長とみなせるのであろうか。

ラカンのトポロジーへの関心は上記ルディネスコの評伝によると 1951 年に始まるが、『エクリ』に収められた諸編を見る限りでは、場 (topos) と場の関係といったトポロジーの出発点となった観点による考察は色濃いものの、メビウスの輪などのパラドキシカルな図形はそれ以降の 60 年代後半になって盛んに援用されてくる (メビウスの輪が『エクリ』の中では最も後年に書かれた〈La science et la vérité〉で軽く言及されているが³⁾)。

ラカンがボロメオの輪について初めて言及したのは 1972 年の 2 月 9 日のセミナーでのことであるが⁴⁾、集中的に取り上げられ始めるのはその次の年度である 1972-73 年度のセミナー *Encore* の全 11 回あった講義内の第 10 回目 (〈Ronds de ficelle〉) 以降のことで、丁度マテームと入れ替わり講義中にしきりと描かれる図式となる。すなわちまとめると『エクリ』以降のラカンの図式に関する主な関心は、トポロジー的な図形→マテーム→結び目、という順で移行している。

マテームとは分析家、大学、主人、ヒステリー患者の四つにディスクールを分け、精神分析の立場を明確に位置づけるものであった。これは当時ラカンの属していたフランス精神分析学会 (La Société française de psychanalyse) の解消に伴い、1963 年に自ら創設したパリ・フロイト学派 (l'Ecole freudienne de Paris) の基礎付け、また精神分析が新設されるパリ大八大学に独立した学部を設置するにあたり、取分け科学的な知と精神分析の関係に見通しをつけ、いかに精神分析を「教育」しうるかという問いへの根本的な反省が要請されていたという外部的な事情も重なっている。

結び目を考える時、結び目の取り上げられた時期がこのマテームの時期の後にあるということが重要となってくる。ジャン＝クロード・ミルネール

はラカンの学説を三つの時期に分けているが、1972-73年度のセミナー *Encore* を第二期から第三期を分かち位置にあるとしている⁵⁾。それはこの年度の講義でマテームの時代が頂点に達し、それと同時にそれをいわば「脱構築」するものとしての結び目が本格的に導入され始めるからだ。ミルネールに拠れば、第二期のラカンは数学におけるブルバキの影響を受け、その数学言語の形式化に倣い精神分析におけるディスクールの形式化を推し進めたものであったが（ラカンを除いてはブルバキと同じように執筆者が無記名なバリ・フロイト学派公認の雑誌 *Scilicet* においてその傾向は著しい）、1968年の学生運動から70年代にかけての数学におけるブルバキ自体の後退、そして自身の学派内の不和といった外部的な影響もあり、マテームによる形式化及びそれに基づく精神分析の伝授へのさらなる見直しの必要をラカンが感じざるをえない状況で登場し、マテームに替わり盛んに援用されるようになったのが「結び目」であった。

そうした見地に立つと、70年代にラカンが執着を示した結び目とはマテーム以前のトポロジー的な図形の援用とは性格を異とするもの、少なくともその単なる延長にあるのではない、と見なさねばなるまい。ラカンが結び目に着目したのも（少なくとも当時は）結び目が数学的に理論化されていないものであったからである⁶⁾。実際、ラカンの結び目とは以下に見るように、トポロジー的な対象として数学に基盤を求めるものではなく、むしろ数学を含めたあらゆる言語の「起源」を射程にいたしたものである。

結び目

あるところに穴があく時、その穴とそれ以外とに分かたれる（穴は面積のない点であってもかまわない）。そうした穴とそれ以外の部分を内—外と関係づけること、またはそうした穴が複数あった場合、穴同士の関係を確立すること、座標づけると言ってもかまわない、そうした場が「想像界 (*l'imaginaire*)」と呼ばれる。穴を穿つ機能は「象徴界 (*le symbolique*)」と呼ばれ（「穴は象徴界の領域である」⁷⁾）、穴を穿つとはある個所に印をつけ

る、印をつけることでその点を特定化することは「名づける」と言い換えることもできる。そして穴のうたれた、穴の顕われる（以下「現」という文字よりも「顕」を多用するが、これはなにがしか「それ以前には無かったものが出現する」というニュアンスを含意している）ことを許す場は遡行的に「現実界 (le réel)」と言われ、穴に外—在 (ex-sister) する⁸⁾。遡行的というのは、穴すなわち象徴界なくして「名づけ」というものは不可能だからだ。すなわち象徴界なくして「現実界」という名で呼ぶことはできない。しかし現実界という場なくしては象徴界も想像界もありえない。また想像界という関係を成立させる領域で初めてその関係に基づいた表象が可能となり（表象するものと表象されるものの「関係」が成り立つことが前提とされるのだから）、その表象に基づいて概念の形成や思考が可能となり⁹⁾、こうしたポロメオの輪で示される三つの領域の「関係」を考えることができる。またラカンは「意味」の領域をこの「関係」と「名」、すなわち想像界と象徴界の交わりに位置づけている。よって現実界とは意味に外—在し、意味を欠く、または意味で捉えることが構造上でできぬ領域である。

しかしながら「結び目」もラカンの思索の産物である限り、また科学にしるその基盤となる数学にしる概念や意味を駆使するものである限り、想像界の領域にあり、それを出るものではない、出ることができないということは常に念頭におかねばなるまい。ラカンもまたそのことは折をみて強調している¹⁰⁾。原理的に、現実界という場になんらかの印がつけられそれを象徴界と呼び、その印をもとに想像界が形成される筈であるが、そうした原理は想像界が形成されてから想像界で想像界から振り返られた、より正確には振り返っていると考えられているものである（想像界を超える「メタ」ランゲージはない）。よってこれら三つの領域の発生は（その振り返った時点から見て）、想像界→現実界→象徴界→想像界、という三すくみに循環するが、三つのどれか一つでも欠ければその循環は断たれ、他の二つも成り立たないということからこの三つは同時に顕われる、と考えなければならない。そうした三すくみの状態とその同時性をポロメオの輪もしくは結び目は示している。

そうしたことはラカンが時として名をあげるフレーゲの数論にも見て取れるかもしれない¹¹⁾。空集合 ϕ とはなにも要素を持たぬ集合であるが、空集合を括弧で括った時、すなわち $\{\phi\}$ すると ϕ という一つの要素を持つ ϕ とは別な集合をつくることができる。以下、 $\{\phi, \{\phi\}\}$ 、 $\{\phi, \{\phi, \{\phi\}\}$ 、 $\{\phi, \{\phi, \{\phi, \{\phi\}\}\}$ 、……、というように同様な操作を無限に繰り返し、これを順序数と定義づけ、 ϕ を0、 $\{\phi\}$ を1、 $\{\phi, \{\phi\}\}$ を2、……、という数字で便宜上対応させてゆけば我々が日常的に馴染んでいる数となる。この順序数を定義づけの基盤となっている空集合は順序数以前のものであり、その要素がある(1以上)とか無い(0)とか判断する基準を持たず、順序数の成立以降に定義される空集合とは性格を異としている。このような順序数の基盤となるような空集合はラカンの言う「現実界」、そしてその空集合を括弧で括ることでその存在に印づける、 ϕ を $\{\}$ に入れることにより「異化」する作用が「象徴界」、以下その印を順序という関係で結び、そうした数をもとに数学を展開してゆく場を「想像界」と言うことができよう。無論こうした発想は既に数が知られている、使われている世界(想像界)においての数への反省から初めて生まれうるものであり(カッシーラーは『関数概念と実数概念』で、人はある数までは、それがどの数までなのかは個人差や文化による違いがあるが、具体的な、実体的なイメージで処理しうが、それを超えた数になると関係ないし計算を通してしか扱うことができなくなる、と述べているが、そうした数同士の関係がクローズ・アップされる段階に到って初めて)、そうした観点からするとやはり上記の想像界→現実界→象徴界→想像界という循環した順序関係がとりあえず認められよう。その数への反省において仮定上、数の関係、または数字そのものも知らぬ ϕ を「0」という数と見なすこと、それはまた同時に「0」という(数)字が(一つ)あると見なすことであり、「1」が発生し、それは同時に0と1の不可分の関係も生じることであり、ここにおいても現実界($\{\}$ にくくられる対象)、象徴界($\{\}$ でくくること)、想像界(前二者の関係)は同時に顕われる、あるいは数字がある時、三者の結び目は(段階を経るのではなく)同時に成立していると考えざるをえない。こうしたことからラカンの結び目とはトポ

ロジック的な対象として数学に根拠を求めているのではなく、むしろ数学の基礎となる数（字）の構成における基盤を問題としているのだ、ということに注意せねばなるまい。この生成の構造はまた数学「言語」に限らず、他の言語にも適用される。意味以前の単なる発声（＝ノイズ）からシニフィアンが区別され、シニフィアンとシニフィアンの関係性が確立されて初めて意味を生成する言語が成り立つ¹²⁾。結び目が前面に押し出される直前のマテームの時代には、このシニフィアンとしての数字や（論理学の量記号を借用した）記号を基盤に形式化を推し進めることが目標とされていたことを考えれば¹³⁾、結び目はマテーム以前の、あるいは同時期のトポロジー的な図形とは次元を異とするのは明らかであろう。

こうした現実界、象徴界、想像界の関係をボロメオの輪もしくは三つ葉の結び目は示している。しかし重要なことは、現実界、象徴界、想像界がそれぞれ他の二つに依存していることであり、このボロメオの輪という図形としての形態が絶対的なものではなく、ラカンが〈R. S. I.〉や *Le sinthome* のセミナーにおいて同様な関係を示す図形をボロメオの輪や結び目のヴァリエーションとしてあげている。しかしそうした図形の違いはあまり議論されていない（議論の展開上、ボロメオの輪より三つ葉の結び目の方が三者の連続性を示唆しやすい、ということはある）。あくまで三つの要素の一つを欠けば他の二つも成立しない（ということはすなわち三者の同時性を意味する）、関係のどこかが変われば、輪の重なる個所の上下が入れ替わればそれは最早三つのばらばらな輪でしかない（結び目の場合、紐の交叉のいずれかの上下が入れ替われば単なる輪になってしまう）、という関係こそが肝要であり、それを図示する具体的な図形とは想像界の産物に過ぎない（そもそも「関係」とは想像界の管轄にあるのであった）。いわば結び目は関係「以前」の「関係」、結び目自体の「起源」をも「示す」ものである。なぜ「示す」というのかといえば、「語る」のは結び目「以後」の語や文字によらねばならぬものであるからだ（「結び目は文字を支える」）。結び目とは図であり、その図が表すのは図＝記号の成立の起源である、といった自己撞着的なものであり、それ以上の分解を許さない〈irréductible〉（ラカン）なものである¹⁴⁾。

sinthome

こうした結び目は三すくみの均衡した状態にあるが、ラカンは結び目を構成する紐の交叉は静態的なものではなく揺らぎやすいものだとする。紐の交叉の上下関係が入れ替わってしまうのだ。そのことはすなわち結び目が解消され、ただの輪の状態におちいることを意味するが、それを防ぐために象徴界と想像界の交わる位置に結び目が解けるのを食い止めるような輪が導入される（ポロメオの輪を想定するならば四番目の輪が加わることになる¹⁵⁾）。この輪が結び目を擬似的に保つのだ。この輪が加わった状態は、どこかしら交叉の関係が変化しているのでポロメオの輪や三つ葉の結び目ではなくなるが、新たな補助的な輪を加えることで結び目の構造を保とうとする。この付け加えられた輪をラカンは〈sinthome〉と名づける。これは〈symptôme〉の中世仏語における綴りだが、ラカンは〈saint homme〉は無論のこと、他に〈saint Thomas (d'Aquin)〉及び英語の“sin”をひっかけている¹⁶⁾。1975-76年度のセミナーはまさに *Le sinthome* と題され、ジェイムス・ジョイス、取分け *Finnegans Wake* のジョイスを sinthome の事例として扱っている。そこではジョイスの実父が「弱い」男であるが故のジョイスにおける象徴的な去勢が不完全であることが暗示されるが（sinthome が顕われるのは象徴界と想像界の交叉する個所である）、この sinthome はまた〈père-version〉とラカンによって呼ばれるが、これは象徴的な父を繋ぎとめるためのもの、すなわち「父へ (vers le père)」と手を伸ばし保持するものであり、この輪なくして結び目は崩壊してしまう。ラカンはこの結び目を（擬似的にも）保つための装置としてジョイスという事例（症例）を読んでいるのだ¹⁷⁾。 *Portrait of the Artist as a Young Man* においてジョイスが仲間から有刺鉄線で縛られるというリンチを受けた時、自らのなにかがむいた皮のようにはがれてゆくような感覚を覚えたことを、体は自分が所有しているという自らの体に関して抱くイメージが崩壊することから、交叉の変調によりポロメオの三つの輪のうち想像界の輪が抜け落ちてしまうようなパターンであると解釈し、それを阻止し、想像界を繋ぎとめるような輪が、すなわち

sinthome が結びを修正するものとしてのエゴ (ego correcteur) として形成される、としている¹⁸⁾。

しかしながら sinthome とはなにもジョイスという特例のみを指す語ではないことは、「精神分析家とは sinthome である」(*Le sinthome*, p. 135) という言葉からもうかがえる。そしてエディプス・コンプレックスについても、この四番目の輪、すなわちラカンのいう sinthome のことを「フロイトは心的現実と呼んでいる。……すなわちエディプス・コンプレックスである」としている。そのエディプス・コンプレックスとは結び目を三つ葉のクローバー状と「別なように」結ぶことであり、精神分析とはその別な結び目に働きかけることである (〈R. S. I.〉の一月十四日の回、*Ornicar*, mars 1975, p. 103)。ジョイスの例での「エゴ」という言葉の使用と「倒錯 (perversion)、それは人間の本质である」(*Le sinthome*, p. 153) という発言から、むしろラカンは三つ葉の結び目が「正常」な人のモデルとしてあるのではなく、丁度 *idéal du moi* の (idéal) の意味での「理想」として想定し、実際には (精神分析家を含めた) 人はなにがしかの sinthome を抱える存在としてみなしているのではなかろうか (*moi idéal* は決して *idéal du moi* と一致しないのであった)。このことは *Le sinthome* のセミナーが行われていた時期に、訪米、いくつかの講演を行った折に哲学者のクワインによる「精神分析の目的とは結び目を解くことなのか」との質問に否定的に答えていることから窺えよう¹⁹⁾。

構造

現実界、象徴界、想像界の結び目が解けるのを食い止める役割を果たすものは sinthome である。なぜ擬似的にも結び目はたまたねばならぬのかといえば、結び目が消えるとそれと同時に象徴界も想像界も解消され (その時、現実界も消滅するのか、という疑問は常に付き纏うが、少なくとも「現実界」という語、概念は消え去る)、言語や意味はその基盤を失い、「語る存在 (parlêtre)」すなわち「人間」は消滅する。結び目にしろポロメオの三つの輪にしろ、それはただの二次元的な輪と異なり、交叉の「上下」というも

う一つの次元を要求していた。ラカンも時としてその三次元性を強調するようなポロメオの輪の図を示している。結び目の解けたただの一つの輪の状態を「自然」と呼ぶならば、結び目、或いは「語る存在」としての人間が成立するには自然の二次元に更に別の次元が加わらねばならないのだ。「自然は結び目を恐れる」というラカンの言葉は、結び目は自然には無い異次元の加わった自然にとっての異物であることを示している。そして結び目や擬似的な結び目を形成する *sinthome* は「自然」と「人間」の境界に位置する、二次元から三次元に引き上げる構造であり、それ無くして人は「自然」へと陥ってしまう。

その結び目の構成を振り返ると、現実界に穴を穿つのが象徴界の役割であったが、その穴を穿つものとはまさに象徴的なファルス (= 父) であろう。その時、現実界は穴を穿たれる「母」なる大地となる(穿たれた時に初めて「母」= 現実界となる、と述べた方が正確か、また *Encore* では女性は現実界に位置づけられていた)。この二者から産出されるのは概念 (conception) の領域である想像界だ (「ファルスとは想像界を受肉する (*donner corps*) ものである」) (〈R. S. I.〉の三月十一日の回、*Ornicar, rentrée 1975*, p. 17)。この母—父—子の関係を保証するのが結び目であり、その関係を繋ぎとめ崩壊を防ぐのが *sinthome* である。父たるファルスを欠く時、子たる関係性やそれに基づく概念、思考はすべて母の領域へと崩壊してしまう。それはいわば親子「関係」を欠いた近親相姦の状態であり、そうした見地からするとラカンの結び目及び *sinthome* とは「語る存在」としての人間、「自然」とは次元を異とする「人間」の起源をめぐる近親相姦の禁忌の構造だ。

ここにおいて晩年のラカンはほぼ三十年前のレヴィ＝ストロースと遭遇する。レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』(初版は1949年)は周知のように構造主義を言語学の枠から解放することでフランスにおける構造主義の隆盛の発端となった書物だが、そこでレヴィ＝ストロースはやはり近親相姦の禁忌をその人類における普遍性故に「自然」と「文化」、すなわち「人間」に特有なもの、との境界に位置付けた。近親相姦の禁忌の機能を女性の交換の保証と見なすことで、「自然」から「社会」へと引き上げる、次元を変える、

交換関係の（重要な）一つとするのだ（文化によりさまざまな近親相姦の規則はその交換方法のヴァリエーションである）。こうした交換関係（女性以外にも経済的な交換など）を欠くことは「自然」の状態に留まることだ。言い換えれば、「自然」の状態に陥らぬようなかしらの近親相姦の禁忌により女性が交換されることが保証され、実行されねばならない。そしてその交換活動を繋ぎとめる機能を担う近親相姦の禁忌は、言語活動を繋ぎとめ保証するものとしての各人の *sinthome* = *perversion* 同様、『親族の基本構造』が例示するように文化によりさまざまな形態を呈する。

結び目の時代のラカンが近親相姦の禁忌について次のように述べている。

「近親相姦の禁忌とは歴史的なものではなく、構造的なものである。なぜか？ 象徴界があるからだ。この禁忌は象徴界による穴に存する。それは私が「父の名」、すなわち名としての父、と呼ぶものが結び目において個別化されて現われるためにである」（〈R. S. I.〉の四月十五日の回、*Ornicar*, rentrée 1975, p. 54）

名づける行為とは象徴界に属していたが、それは印づけること、すなわち穴を穿つであり、名がある時、既に穴は穿たれてしまっている。名なくして語ることはあたわず、人が語る時、それは既にこのラカンのいう近親相姦の禁忌は成立してしまっていることを意味する（結び目が成立している）。語るとはなんらかの意味での他者との言葉の交換であるとするならば、言葉が成立する時点でやはり近親相姦の禁忌が要請されることとなる。しかしレヴィ＝ストロースの近親相姦の禁忌において流通するものは女性であったのに対し、言語的なコミュニケーションで流通するものは言葉ないし記号である。ということはレヴィ＝ストロースの親族体系における女性は交換される記号としてあり、その近親相姦の禁忌はその記号としての女性が交換される時に働いている。一方、ラカンの近親相姦の禁忌とはその記号を成り立たせる時に働くものであった。すなわちレヴィ＝ストロースの交換されるものとしての女性が交換されるものとして印付けられ（記号化され）、交換「関係」

の網に組み込まれる段階で記号の生成の前提となっているラカンの近親相姦の禁忌が既に成り立っているものと考えねばなるまい。レヴィ＝ストロースの取り上げる近親相姦の禁忌の議論には既にラカンの近親相姦の禁忌が働いており、レヴィ＝ストロースの構造主義はディスクールである限り想像界の産物であり、ラカンの結び目を前提とせざるをえない²⁰⁾。

こうしたことの違いはラカンが常に自然科学の「起源」について思索を凝らしてきたのに対し、レヴィ＝ストロースにあっては人文科学の理想を自然科学に求めることを比較的無批判に受け入れてきたことの反映といえるかもしれない。レヴィ＝ストロースは人文科学における科学性の確立に際し、自然科学における数学言語の厳格性を羨望の念で称え（ブルバキに範を置いたマテームの時期までのラカンにも多かれ少なかれ当てはまるが、ラカンにあっては例えば1966年初出の〈La science et la vérité〉において精神分析の立場からの科学に対する反省を行っている）、また後年には生物学の発展に伴い、自身が『親族の基本構造』において確立しようとしていた人文科学の自然科学に対する独自性が生物学に依存する見解の可能性を否定しなくなった。そうした見通しはチョムスキーの人間の言語生成能力は生物学的に大脳に先天的に備わっているという主張と軌を一にしよう（それを認めてもレヴィ＝ストロースは言語や文化の多様性の根拠を問うだろうが、何故遺伝的には然程変わらぬ筈のプログラムが斯くもさまざまな言語として現われなければならないのか）。いわばレヴィ＝ストロースのディスクールはラカンのマテームの分類に当てはめれば「大学のディスクール」、すなわち科学（「知（savoir）」）のディスクールと同じ位置にある。そうしたことは科学のディスクールと精神分析のディスクールを区別するマテームの見通しは破棄されたとしても、それは精神分析の科学ないしその言語たる数学への解消、屈服ではなく、続く結び目の時代のラカンは改めて数学の「起源」を問い直すことを射程に入れていたことは繰り返す必要はないであろう。

註

- 1) 『ジャック・ラカン伝』、藤野邦夫訳、河出書房新社、2001年、第8部第2

章「マテームとボロメオの、結びめ」参照。

- 2) ボロメオの輪、結び目ともにそのヴァリエーションがつつと図示されるが、その標準的なものは、ボロメオの輪は、Jacques Lacan, *Encore*, Seuil, 1975, p. 112, fig. 3、Lacan, *Le sinthome*, Seuil, 2005, p. 20、Lacan, <Conférences et entretiens dans des universités nord-américaines> dans *Scilicet*, N° 6/7, Seuil, 1976, p. 49、<Le séminaire de Jacques Lacan R.S.I.>, dans *Ornicar*, Seuil, janvier 1975, p. 89, fig. 1、三つ葉のクローバー状の結び目とは、*Encore*, p. 111, fig. 2、*Le sinthome*, p. 42、にそれぞれあげられている図である。
- 3) *Écrits*, Seuil, 1966, p. 861. 同論文の初出は、*Cahiers pour l'analyse*, No.1, S.E.R., Paris, janvier 1966.
- 4) 『ジャック・ラカン伝』、391 頁。
- 5) Jean-Claude Milner, *L'Œuvre claire*, Seuil, 1995.
- 6) <il n'y a aucune théorie des nœuds. Aux nœuds ne s'applique jusqu'à ce jour aucune formalisation mathématique...> (*Encore*, p. 116)
<L'abord mathématique du nœud dans la topologie est insuffisant.> (*Le sinthome*, p. 42)
Alain Juranville, Marc Darmon, Jean-Paul Gilson はそれぞれその著書でラカンの「結び目」を扱っているが、マテーム以前のトポロジーの援用の延長線上として位置付けている (Juranville, *Lacan et philosophie*, P.U.F., 1984、Darmon, *Essais sur la Topologie lacanienne*, l'Association Freudienne, 1990、Gilson, *La topologie de Lacan*, Balzac, Montréal, 1994)。
とはいえラカン自身結び目を数学的に処理することに関心がなかったわけではなく、トポロジーに通じた 68 年の世代に分類されよう Pierre Soury や Jean-Michel Vappereau にその理論化を促していた。そうした結び目の数学的な扱いに関しては、Vappereau, *Essaim*, Point hors ligne, Paris, 1985、及び、*Nœud*, Point hors ligne, 1997。ルディネスコの挙げる Soury の遺稿集、*Chaînes et nœuds*, 1988、は参照できなかった。
- 7) <R. S. I. > 二月十八日の回 (*Ornicar*, mars, 1975, p. 104)。
- 8) <les trios romds participant de l'imaginaire en tant que consistance, du symbolique en tant que trou, et du réel en tant qu'à eux ex-sistant.>, (*Le sinthome*, p. 56)
- 9) ミルネールの想像界に関する簡潔な要約を借りれば (*Les noms indistincts*, Seuil, 1983, p. 16)、
I le discours est lien,
II seul l'imaginaire lie,

- III l'imaginaire est le lieu de la representation,
- IV le semblant implique nécessairement la representation,
- V il n'est pas de discours qui ne soit du semblant.

10) 例えば、

Quand nous appelons un element de la chaîne l'imaginaire, un autre le reel, et le troisième le symbolique, le sens, comme je vous l'ai déjà montré, est dans le champ entre l'imaginaire et le symbolique. Nous ne pouvons espérer le placer ailleurs, parce que tout ce que nous pensons, nous en sommes réduits à l'imaginer. Seulement, nous ne pensons pas sans mots...
(*Le sinthome*, p. 92)

なお周知のように「現実界」、「象徴界」、「想像界」、という概念は1954年頃から、すなわち1954-55年度のセミナーである *Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse* (Seuil, 1977) や *Écrits* 所収の〈Réponse au commentaire de Jean Hyppolite〉辺りを嚆矢とし、ラカンの学説に欠かせないものであるが、ここではこれら概念をこの時期のラカンは再度根本から捉えなおす作業を行っているものとし、以前の言説にとられることなく定義しなおしている。こうした概念に変化はあるのか、という疑問はまた別に検討されねばなるまい。

- 11) ラカンに論理学および数論への関心を引き起こしたのはラカンの〈La science et la vérité〉の初出（上記参照）と同じ号に掲載された Jacques-Alain Miller の〈La suture – Éléments de la logique du signifiant〉である。後にミレールはラカンの Seuil 社から出版されるセミナーの校訂を任されることとなる。
- 12) *Le sinthome*, p. 76.
- 13) La formalisation mathématique est notre but, notre idéal. Pourquoi? – parce que seule elle est mathématique, c'est-à-dire capable de se transmettre intégralement. (*Encore*, p. 108)

Le mathématique se profère du seul réel d'abord reconnu dans le langage: à savoir le nombre (Lacan, 〈L'Étourdit〉 dans *Scilicet*, No. 4, Seuil, 1973, p. 37, ou repris dans *Autres écrits*, Seuil, 2001)

- 14) 語ること、思考することが想像界の領域を出ることがその構造上不可能な限り、現実界を語ることは『論理哲学論考』の有名な〈Wovon man nicht sprechen kann, darüber muss man schweigen〉という結びの言葉と衝突せざるをえない。この点についてミレールは、結び目の時代（彼の分類によると第三期のラカン）において精神分析はマテームを通して十全に伝達しうる、というマテーム時代（第二期）のテーゼを放棄しているとする。

実際晩年に近づくほどラカンは講義中に結び目を描くだけで沈黙することが多くなったという。しかしながら、精神分析とは全てを語り尽くすことはできないが我々に語りつづけることをやまない無意識について全てではないにしても (pas tout)、語る (mi-dire) 戦略であり、それはいわば語りうるものと語ることのできないものの境界を、ヴィトゲンシュタインはそのこちら側に留まったのに対し、往復しつづけることである (*L'Œuvre Claire*, pp. 167–171)。他にラカンとヴィトゲンシュタインの考察として、Françoise Fonteneau, *L'Éthique du silence*, Seuil, 1999。

- 15) 結び目を考えた時、交叉は三箇所ある。すなわち、想像界—象徴界、象徴界—現実界、現実界—想像界、のそれぞれ交わる個所である。すると交叉のエラーが起り、新たな輪がそれを補うものとして顕われるパターンも三つであり、ラカンも〈R. S. I.〉の最終回において次年度のセミナーの表題として〈4、5、6〉を用意していた。つまりポロメオの三つの輪に加わる輪のパターンが三つあることを示唆していた。が、〈R. S. I.〉の次のセミナーは *Le sinthome* となり、そこではここでのように想像界と象徴界の間に顕われる第四の輪しか扱われず、ここでは我々もこれに限定し議論を進める。
- 16) ラカンが参照しているのは Wartburg の辞書のようなのであるが、*Dictionnaire historique de la langue française* (nouvelle edition, Le Robert, 1995) では次のようになっている：

SYMPTÔME n.m., refection (1538) de sinthome (1495; peut-être v. 1363), est emprunté au bas latin medical *symptoma*, lui-même emprunt au grec *sumptōma*, -matos «affaïsement», «événement malheureux», «coïncidence» et spécialement «coïncidence de signes»

また、〈R. S. I.〉の段階では〈sinthome〉とは綴られず、〈symptôme〉であった。

- 17) J'ai dit que Joyce était le symptôme. Toute son œuvre en est un long témoignage. (*Le sinthome*, p. 70)

ラカンは特に引用していないが、*Finnegans Wake* の最後の個所に次のような一節を見出すのは興味深い (Penguin Books, 1992, p.628);

I go back to you, may cold father, may cold mad father, may cold mad feary father …

この作品の末尾が冒頭に繋がるという説に従えば、この「父へと向かう」行為は作品「以前」のこととも解釈されよう。「父へと向かう」輪の形成で象徴的去勢が遂行され初めて言葉を扱うことができる。

- 18) *Le sinthome*, pp. 148–152.

- 19) *Scilicet*, N°. 6/7, 1976, p. 60.
- 20) レヴィ＝ストロースの『親族の基本構造』の末尾に以下のような一節が見出される；
- 「象徴的思考の出現は女を、発せられる言葉のように、交換されるモノに変えざるをえなくなったはずである。実際、この新たなケースではそうすることが、二つの相容れない側面を示す女の矛盾を乗り越える、唯一の手段であった。欲望の固有の対象、つまりは性本能を煽る占有の対象である一方、まさにそうであるがゆえに同時に他者の欲望の向けられる主体、すなわち他者と縁組させて他者をつなぎいれる手段でもあるとの二側面である。しかし女はけっして純然たる記号になりえなかった。」
(福井和美訳、青弓社、2000年、795-6頁)
- ここでの我々の論議に照らし合わせるならば、普遍的な (universel) ファルスの法の外に位置するものとしての女性、すなわち現実界としての女性をそのファルスによって記号化する、例えば交換関係の対象と見なそうとし、想像界の「関係」の網で捕らえようとしても捕らえきれず、必ず取りこぼすものがある、ということになろう。これはまさしく女性を現実界の「他者」とみなし、普遍化された定冠詞付の *la femme* は存在しない (*La femme n'existe pas.*)、なぜなら普遍化とは象徴的ファルスによるものであるから、或いは性「関係」は存在しない、なぜなら「関係」とは想像界の領域にあるから、といった『アンコール』前後のラカンのテーゼと矛盾しない。〈Il n'y a de femme qu'exclue par la nature des choses qui est la nature des mots〉 (*Encore*, p. 68)、すなわち女性とは言葉に外—在する「現実界」である。それは穴を穿たれても (記号化されても)、穴から取りこぼされたものがある。
- 21) Lévi-Strauss の *Le regard éloigné* (Plon, 1983) の第一部 〈L'inné et l'acquis〉。訪米したラカンとチョムスキーのすれ違いに関しては、『ジャック・ラカン伝』407-8頁、また *Le sinthome* の十二月九日の回 (〈de ce qui fait trou dans le réel〉) を参照。